神奈川県眼科医会

第２回　神奈川眼科学会

日時：2010年４月24日（土）16：00～19：00
場所：ホテルキャメロットジャパン

《一般演題》

１．二重膜濾過法が著効した抗アクアポリン４抗体陽性視神経炎の一例

（北里大）
高　郁嘉　市邉　義章　石川　均
後関　利明　清水　公也
（新潟大）
高木　峰夫
（金沢医大　神経内科）
田中　恵子

2004年 Lennon らは視神経脊髄炎に特異的な抗体である抗 AQP ４抗体を報告した。今回我々は，二重膜濾過法が著効した抗 AQP ４抗体陽性視神経炎の一例を経験したので報告する。症例は31歳女性，初診時 Vd ＝（0.7 p），右眼上水平半盲を認めた。３日後 Vd ＝光覚となり，MRI にて視神経に造影効果を認めた。右眼神経炎の診断でステロイドパルス療法を２クール施行したが十分な効果は得られなかった。その後，抗 AQP ４抗体陽性と判明，二重膜濾過法を施行し，Vd ＝（1.2）まで回復した。抗 AQP ４抗体陽性視神経炎は重症化しやすく，視神経炎の原因精査として抗 AQP ４抗体検索は必須であり，二重膜濾過法がその治療の１つとして重要と考えられた。

２．県立静岡がんセンター眼科８年間の経験から得たもの

（県立静岡がんセンター，北里大）　柏木　広哉
（北里大）　清水　公也

【緒言】演者は，2002年４月神奈川県から三島市近郊の県立静岡がんセンターに赴任した。その中で経験した事を２点報告する。

【症例】１）開院から７年半の眼腫瘍総数は330例（内５例が神奈川県から紹介）。その中の眼内悪性黒色腫10例について報告する。男性７名，女性３名，年齢は37歳から83歳，観察期間９ヶ月から４年４ヶ月である。治療は眼球摘出８例，重粒子線治療２例，転移死亡例は１例であった。２）経口抗がん剤Ｓ１による涙道や角膜障害は，最近問題となっており，この点について簡単に述べる。

【考察】当院では国内外の眼腫瘍専門医との連携，院内チーム医療を実践し，症例をまとめていく事が重要と考える。

３．抗緑内障点眼薬を３剤以上併用した症例に対する Selective laser trabeculoplasty（SLT）の治療成績

（聖マリアンナ医大）
徳田　直人　井上　順　松澤亜紀子
高木　均　上野　聰樹

【目的】既に抗緑内障点眼薬を３剤以上併用し手術適応と思われる症例に対する SLT の効果を検討する。

【対象・方法】対象は，緑内障薬剤スコア（抗緑内障点眼１点，炭酸脱水酵素阻害薬内服２点）が３点以上の症例に SLT を施行し６ヶ月以上経過観察が可能であった52眼。病型は原発開放隅角緑内障（POAG）33眼，混合型緑内障（Mixed. G）８眼，落屑緑内障（PEG）７眼，ステロイド緑内障（Ste. G）４眼。SLT 照射範囲は270～360°。眼圧が SLT 施行前と同等，もしくは上回る時点を死亡と定義し生存分析を行った。

【結果】全症例の１年生存率は68.5%，２年生存率は33.7%，病型別の１年生存率は Ste. G　100%，POAG 66.4%，PEG　57.1%，Mixed. G　36.5%であった。

【結論】full medication 時に SLT を試す価値のある症例は病型により存在するが，効果が得られなかった場合には速やかに手術加療を行うことが出来る環境で行うべき処置と言える。

４．原田病の再燃が疑われた，硝子体黄斑牽引症候群の一例

（横浜市大）
安原美紗子　小林志乃ぶ　竹内　正樹
田口　和之　澁谷　悦子　加藤　徹朗
野村　英一　西出　忠之　水木　信久

症例：65歳男性。25歳の時に Vogt －小柳－原田病の診断。ステロイド内服加療歴あるが，平成19年以降炎症は落ち着いており，近医で経過観察されていた。平成21年７月頃より両眼視力低下の自覚あり，黄斑浮腫，硝子体混濁を認めた。原田病の再燃が疑われプレドニン30mg/日で内服開始するも改善なく，精査加療目的に11月当院紹介となった。初診時，視力右（1.0）左（0.4），診察所見では黄斑浮腫（右＜左），OCT にて左硝子体牽引がみられ，左硝子体黄斑牽引症候群と診断。12月７日，左硝子体手術を施行。術後視力（1.2）まで回復した。